

事例 2

日本語上級コースの目標設定に Can-do を利用する

—日本語能力試験 1 級合格のその先へ—

国際交流基金

ソウル日本文化センター 一般日本語講座

機関／コースの概要

国際交流基金ソウル日本文化センター（以下、ソウルセンター）上級レベルの一般成人を対象にした、技能別の一般日本語講座（以下、ソウル講座）です。開講期間は前期（3～6 月）と後期（9～12 月）の 2 期で、それぞれ 1 回 100 分の授業を週 2 回、全 20 回ずつ実施しています。受講生は、高校生を除く 18 歳以上の社会人と学生を対象としていますが、日本語能力試験 1 級合格が受講条件となっています。学習目的は、「日本語能力向上」が半数程度にのぼり、以下、「日本語力維持」「趣味」「仕事のため」と続いています。

本稿での取り組みは、技能別科目のうち、場面に沿ったコミュニケーションの口頭能力の育成を目指す「対話技術」を対象としています。ソウルセンターでは受講生の便宜のため違う時間帯で同内容の「対話技術 1」と「対話技術 2」が開講されそれぞれ 1 名の講師が担当していますが、今回は「対話技術 1」を対象としています。

実践者・協力者

ソウルセンターでは、国際交流基金が派遣している日本語教育専門家がソウル講座全体の運営に携わり、各科目は韓国在住の客員講師が単独で担当しています。



国際交流基金ソウル日本文化センター

客員講師 大田祥江

実践の概要

本実践は、ソウル講座の「対話技術 1」の科目において、第 1 期（2008 年後期）から第 3 期（2009 年後期）にわたって、JF 日本語教育スタンダード（以下、JF スタンダード）開発の一環として、CEFR Can-do を利用して目標を設定し、受講生に提示して目標を共有することで自律的学習支援を目指した取り組みです。ソウル講座には、

- (1) 日本語能力試験 1 級合格者であっても、必ずしも日本語運用力が等質でない上級学習者の学習目標をどのように設定すればよいか、
- (2) 上級学習者の自律学習をどのようにサポートすればよいか、

という 2 つの大きな課題がありました。これらの課題を解決するために、どのような取り組みを行い、その過程でどのような課題を乗り越え、その結果どのような効果があったかについて報告します。

ソウル講座での実践のプロセスと成果は、日本語能力上級者のコースを見直したい方々の参考となるでしょう。

本取り組みは JF スタンダード開発途中で行われた取り組みです。ソウル講座担当者が経験した困難やそれを克服する努力の軌跡を踏まえ、『JF スタンダード 2010』を形にすることができました。

背景とねらい

「対話技術 1」では、「話す」ことを中心に、場面に合ったコミュニケーション能力を育成することが目標です。同時に自分の口頭能力レベルを確認して弱点や課題を把握することも目指しています。「対話技術 1」の受講生は 10 代後半から 60 代までと幅広く、同じ「日本語能力試験 1 級合格者」といっても、人によって口頭能力レベルは様々です。そのため多種多様な学習履歴や学習継続動機を持つ上級学習者を対象に講座を展開するうえで、具体的な科目の内容や学習到達レベルが明確にされてこなかったことがこれまでの課題となっていました。またこれまで、教室外での受講生の自律的な学びを支援するという取り組みも意識的に行われてきませんでした。

そこで、2008 年 9 月から約 1 年半をかけて CEFR Can-do を使った授業デザインを行いました。取り組みの特徴は次の 2 点です。

- ①「対話技術」の学習目標を CEFR Can-do を使って設定する。そして毎回の授業の学習目標として、実際の授業活動と適合させた「今日の目標」を作成する。さらには、これらの学習目標を受講生に明示する。
- ②「科目の目標」として選ばれた CEFR Can-do をもとに、学習者用の自己評価チェックリストを作成する。チェックリストとともに、学習の成果物をファイリングするためのポートフォリオを導入する。

これらの取り組みを通して、教師と学習者が、学習目標を共有し、自らの内省につなげることを目指します。

経緯と取り組みの概要

(1)「対話技術 1」の取り組み

本実践の具体的な取り組みは次の 5 つに集約されます。

① CEFR Can-do を使って「科目の目標」を見直す

まず、ソウルセンター所属の講座運営担当者が受講生の現在のレベルを CEFR 共通参照レベルで見直すことから着手しました。その結果、「対話技術」を受講している上級学習者（日本語能力試験 1 級合格者）の大まかな目標レベルは、CEFR 共通参照レベルの B2～C1 であると判定しました。

次に、493 ある CEFR Can-do のうち、講座に関連するカテゴリー（主に、口頭の産出活動、相互行為活動のカテゴリー）に注目し、「科目の目標」となる Can-do を B2～C1 レベルから選定しました。選択した CEFR Can-do は、第 1 期が 15 項目、第 2 期が 7 項目、第 3 期が 6 項目でした。CEFR Can-do は、多言語に対応させるよう汎用性を持たせる目的で抽象性の高い記述となっています。そこで「対話技術」の科目で使いやすい形にするために、CEFR Can-do を、加筆・修正しました。

＜修正前＞		
レベル	Category Code	記述内容
B2	SP2-B2-1	語彙やテキスト構成の空白を補う間接的な表現や言い換えを使うことができる。
＜修正後＞		
B2	SP2-B2-1	適切な語彙が思い浮かばないときに、別の語彙で言い換えたり、間接的な表現で説明することができる。

図 1 修正前と修正後の記述内容例

② 学習者と共有する「今日の目標」

「科目の目標」を学習者と共有するために、毎回の授業ごとに「今日の目標」という、より具体的な目標記述も作成し、受講生に配布するプリントの冒頭で示すことにしました。

しかし、第 1 期と第 2 期で設定した「今日の目標」は、具体的な教室活動との結びつきが強く、「科目の目標」の Can-do との関連性が明確でないという問題がありました。そこで第 3 期では、両者をより関連付けて記述することで、学期を通じて一貫性のある学習目標の共有を図ることを目指しました。学期開始前に「科目の目標」を見直し、より関連のある CEFR Can-do を選んだ上で、分かりやすく簡潔な記述に整えて「今日の目標」としました。

	コミュニケーション活動	カテゴリー	目標記述
1	相互行為活動：口頭のやりとり	インタビューをすること/受けること	あいづちをうまく使い、議論をなめらかに発展させることができる。
2	やり取りの方略	発言権の取得・保持	発言権を得るために、または考える時間を稼いで自分の発言権を保持するために、手持ちの談話機能表現の中から、適当なものを選んで、話し出しの文句を述べることができる。
3	やり取りの方略	協力	相手の反応や意見、推論に対応して、それに対してコメントや推論を述べて、議論を発展させることができる。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① あいづちを上手に使う ② 上手に語彙やフレーズを使って、話し出し、発言権を得る ③ 相手の意見に対してコメントを述べ、議論を発展させる |
|---|

図 2 第 3 期の「科目の目標」抜粋と「今日の目標」の例

③ 学習者と共有する「自己評価チェックリスト」

「科目の目標」をもとに、学習者自身が各項目を評価する「自己評価チェックリスト」の作成を行いました。チェックリストの文言は、「科目の目標」の Can-do に少し加筆・修正を加えましたが、日本語による記述がやや抽象的で難しい語彙も多かったため、韓国語訳もつけることにしました。この自己評価活動は各学期で 3 回（コース開始時、中盤、コース終了時）、受講生に 4 段階でチェックしてもらうこととしました。

自己評価チェックリスト

よくできる:4/できる:3/あまりできない:2/できない:1

	日本語	韓国語	項目	開始時	中間	終了時	教師 コメント
1	個人的に重要な出来事や経験を中心に、関連事項を説明し、根拠を示して自分の意見をはっきりと説明し、主張できる。	개인적으로 중요한 사건이나 경험을 중심으로 관련사항을 설명하고 근거를 제시하여 자신의 의견을 확실하게 설명하고 주장할 수 있다.	説明、根拠述べ、主張	3	3	3	
2	相手の反応や意見、推論に対応して、それに対してコメントや推論を述べて、議論を発展させることができる。	상대방의 반응이나 의견, 추론에 대응하여 그것에 대해서 코멘트나 추론을 서술하고 논의를 발전시킬 수 있다.	相手の反応を受け、議論を発展させられる	3	2	3	
3	あいづちをうまく使える。	말장구를 능숙하게 쓸 수 있다.	あいづち	3	4	4	
4	はっきりとした、自然な発音やイントネーションを身につけている。	확실하고 자연스러운 발음과 억양을 익힌다.	発音	2	3	3	
5	その場の状況や、聞き手に応じて、内容、話し方を調節することができる。その場の状況にふさわしい丁寧の言葉遣いができる。	그 장소의 상황과 듣는 사람에 맞춰 내용이나 말투를 조절하여 상황에 적절한 정도의 공손한 말씨를 사용할 수 있다.	場面に応じた話し方、言葉遣い	2	2	2	☆
6	適切な語彙が思い浮かばないときに、別の語彙で言い換えたり、間接的な表現で説明することができる。	적절한 어휘가 떠오르지 않았을 때, 다른 어휘로 바꿔 말하거나 간접적인 표현으로 설명할 수 있다.	言い換え	3	3	3	
7	インタビューをなめらかに効果的に行うことができる。興味深い返答を数り上げ、用意した質問を変えるなどしながら、さらに興味深い答えを引き出すことができる。	인터뷰를 매끄럽고 효과적으로 할 수 있다. 흥미로운 답변이 있으면 재택하며, 준비한 질문을 바꾸는 등 보다 더 흥미로운 답변을 이끌어내도록 할 수 있다.	効果的に話す	3	3	3	

図3 自己評価チェックリスト

④ ポートフォリオの導入

自己評価チェックリストとともに、学習の成果物を一緒にファイリングするポートフォリオを作成しました。成果物については、受講生が自分自身で取捨選択しポートフォリオに整理していくという方法をとりました。



図4 ポートフォリオファイル

⑤ 振り返りシートの導入

受講生の内省を促す目的で、「振り返りシート」を導入しました。これは、受講生が毎回の授業の最後に、「1. 今日の授業で気をつけて学習した点」「2. 新しく学んだ単語・文法など」「3. 講師への質問や要望など」をひとことずつ記入するもので、「4. 講師より」欄に講師がコメントを記してから次の授業で返却するという仕組みをとりました。最終的にはポートフォリオにファイリングしました。

4月11日	①今回の授業で気をつけて学習した点	②新しく学んだ単語・文法など
	議論を発展させる	話の要点を折衷する 発話 - 流暢 はつわ りのちう
	③講師への質問や要望など	講師より
	まうい ほんとうに たのしかったです。 もっと じょうずに なれるように がんばりたい。	とてもおどろきの雰囲気 上手にできていたと思います!

図5 振り返りシート

(2) 各期の具体的な作業プロセス

各期における作業プロセスは次のとおりです。

【第1期（2008年9月～12月）】

「対話技術 2」の担当講師とともに、CEFR Can-do をもとに「科目の目標」を設定し(①)、自己評価チェックリストを作成しました(③)。具体的な授業活動に沿って作られた「今日の目標」(②)を各授業の冒頭で確認しました。

【第2期（2009年3月～5月）】

CEFR Can-do を使った「科目の目標」設定(①)については、第1期で選択した Can-do より数を絞り、1つの目標が複数回の授業で扱えるよう改善を試みました。第1期の取り組みに加え、ポートフォリオ(④)を授業活動と関連づけて取り入れることに力を注ぎました。具体的には、**JFスタンダード**が重視している「異文化理解」をテーマに、日本語ネイティブゲストを招いたインタビュー授業を行い、その準備資料等をポートフォリオに収めることにしました。

【第3期（2009年9月～11月）】

第2期の取り組みに加え、「科目の目標」(①)と「今日の目標」(③)を関連づけながら目標設定を行いました。具体的には、「科目の目標」を実際の授業に沿った形となるよう、「対話技術 1」の授業活動とより関連している CEFR Can-do のカテゴリーの中から選定するよう心がけました。さらに「科目の目標」を易しく書き換える形で「今日の目標」を作成し、また両者が関連づけられていることを受講生にも明示しました。

また、受講生の内省を促す目的で新たに振り返りシート(⑤)を導入し、毎回の授業後に提出してもらいました。

効果と今後の展望

(1) 「話す」技能を重視した学習目標の設定

日本語能力試験 1 級合格者を対象としたソウルセンターの講座において、「上級レベル」という非常に曖昧な説明しかされてきませんでした。CEFR Can-do を活用することで、「話す」技能を重視した学習目標の設定が可能となりました。カテゴリー別に細かく記述された CEFR Can-do を参照することで、受講生の現状レベルや授業で目指すべき目標を改めて講師自身が確認することができ、さらには他の講師とも共有することができました。

(2) 学習者との目標共有

「科目の目標」のほかに、具体的な教室活動に基づいた「今日の目標」を毎回の授業で提示し、それを受講生と確認することで、「対話技術 1」の目標を共有することができました。第1～2期では、「今日の目標」がこれまでの授業活動から作られており、CEFR Can-do から選定された「科目の目標」との連関が取れていませんでしたが、第3期では、授業活動を意識して「科目の目標」を選び、そこから「今日の目標」を作成するというプロセスを経ることで、学期を通じて一貫した目標を設定することができました。

(3) 「自己評価チェックリスト」

講座終了時(第1期)に行ったチェックリストに関する受講生アンケートでは、「授業に参加

する目標が明確になった」「自身の発展をみることができよかった」という肯定的な反応が多くあり、学習目標の共有と達成度の確認に役立ったといえます。これは受講生が自分の学習プロセスを評価し、それをポートフォリオに収めたという点で自律的な学習の支援にもつながったといえるでしょう。

一方で「もっと簡単なほうがチェックしやすいと思った」という意見もあり、抽象的な CEFR Can-do をどのように分かりやすく示すかという課題も残りました。この実践では、講師が加筆・修正を加えるという作業を行って受講生にも分かりやすい記述にするよう配慮しましたが、CEFR Can-do を書き換えることで元のレベルが変わってしまうのではないかと、という危惧もありました。CEFR 共通参照レベルのレベルイメージの共有、そして Can-do のレベル別記述作成に関する情報共有が今後必要となるだろうと思います。

(4)「成果物」

ポートフォリオを授業活動の一貫として積極的に取り入れたのは第 2 期以降です。「対話技術 1」は「話す」をメインにした授業であるため、最初は自己評価チェックリスト以外に学習の成果物として何を保存すればいいのか戸惑う受講生も多かったのですが、第 2 期に、「異文化理解」をテーマに、日本語ネイティブゲストを招いたインタビュー活動を行ったところ、ポートフォリオに入れる成果物が充実してきました。たとえば、異文化理解に関する事前レポート、インタビューの振り返りレポート、他の受講生や講師からの評価シート、などです。受講生によっては、ちょっとしたメモでも捨てずに成果として保管しておいて、その後の学習の参考にするなど、継続的な学習に利用される可能性が示されました。学期末に行った受講生アンケートでも概ね好評で、「プリントを入れてつかうのがべんりでした」「今まで自分が勉強した記録をもつことができますので」などの意見が見られました。

(5)一貫したコースデザイン：目標から評価へ

今後の課題として、評価システムを再考することが挙げられます。これまで「対話技術 1」では、スピーチ、レポート、参加態度を評価対象として数値化してきました（一般講座であることから、あまり精密な評価は行っていない）。今回、自己評価チェックリストと振り返りシートを取り入れましたが、受講生による自己評価が中心であり、「科目の目標」がどのくらい達成されたのか、日本語力の向上をある程度客観的に判断する評価の基準はまだ明確ではありません。「対話技術」の学習目標の見直しとともに、目標に見合った評価システムを整えていく必要があるでしょう。目標・教授・評価の一貫性をめざしたコースデザインおよび教授実践をどのように行っていくかが、今後の大きな課題の 1 つです。

(6)研修・ワークショップの必要性

JF スタンダード開発の過程で行った本実践は、JF スタンダード開発担当者からの情報提供、ワークショップの開催などといった支援体制があつてこそ、実現したものだといえます。今後、JF スタンダードが提案する「日本語の教え方・学び方・評価の仕方」を実際に現場で展開する場合には、その理念や考え方に対する理解を深め、専門的な知見を交換するための教師研修やワークショップの開催が必要と考えます。

(7) まずは、やってみる

はじめのうちは、CEFR Can-do の難解で細かな記述に慣れることができず、どのように活用すればいいのか戸惑うことも少なくありませんでした。しかし、CEFR Can-do から出発して、「対話技術 1」の受講生に合うように Can-do 記述を書き換えたり、提示方法を工夫したりすることで、効果的な授業実践ができてきたと思います。各教育機関でもあまり形にとらわれすぎることなく、臨機応変に使い勝手が良い方法で利用することが大切だと考えます。CEFR Can-do をコースの目標設定に参考にする、自己評価チェックリストを取り入れる、振り返りシートを作る、自己評価チェックリストを作る、ポートフォリオを使うなど、興味のある部分から取り入れてみることで、必ずや授業改善につながっていくだろうと思います。

学習者の声

- ① 「授業の振り返りシート」はどうでしたか？
- ② 毎回授業で配るプリント冒頭の「今日の目標」は役に立ちましたか？
- ③ 授業用ファイルには、どんなものを入れましたか？

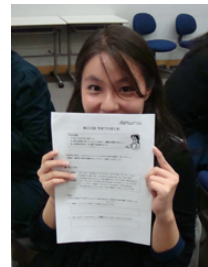
(21歳、大学生)

- ① 新しく学んだ単語・文法を書く所はなかなか良かったと思います。あと、先生に質問や要望を書いて、その返事を待つこともおもしろかったです。
- ② あんまり参考にならないではないかなと思います。
- ③ あんまり役に立たなかったと思います。授業のレジュメはもちろん入っているんですけど重くてなかなか持って授業に来られないんですね。



(26歳、社会人)

- ① 先生のコメントとかが書けてもらって、なんか嬉しいかんじ(?)になって本当によかったです。そして、自分のべんきょうをふりかえるきかいになってよかったです。
- ② 意識して「今日の目標」を考えることができ、やくにたちました。
- ③ 授業のレジュメや「話そう発表」のチェックシートをすべてあつめておきました。本当にたすかりました。先生、本当に楽しい授業でした！ありがとうございます。



(38歳、社会人)

- ① 先生とのふたりきりで話せますから、いいでした。
- ② 今日の目標を気をつけて授業をしていると思います。
- ③ 毎度配るプリントを入れてばらばらにならなくてよかったです。



教師の声

スタンダード導入の最初の学期は難しく考え過ぎたり、CEFR の記述内容に捕らわれ過ぎていた面が大きく、講師・受講生共に戸惑いを感じていた部分もありました。しかし、期を経るごとにCEFR の記述に捕らわれ過ぎない事を心がけ、より理解しやすく簡潔なものへと記述し直したことで、講師・受講生双方にとってストレス無く自然な形で授業に組み込めるようになり、次第に効果的に活用することが可能になったと思います。特に第3期目は、チェックリストと「今日の目標」に一貫性を持たせ、「振り返りシート」を用いた効果は大きかったです。通常、当センターではどの科目においても修了できるのは約3分の2程度の受講生ですが、この科目の第3期目においては途中で病気のため来られなくなった受講生1人を除いて全員が修了することができました。その理由は一概には言えませんが、振り返りシートをはじめとしたスタンダードの各取り組みの成果の1つではないかと思っています。引き続き受講生の学習意欲を継続させ、満足してもらえるような授業設計に勤めたいと思います。

JFスタンダードについては、CEFR Can-do の細かで難解な記述内容に捕らわれることなく、日本語教育の現場に合った分かりやすく気軽に導入しやすい方法で構築していく事が重要です。各教育機関でもあまり形に捕らわれ過ぎることなく、臨機応変に使い勝手が良い方法で利用してみたいと思います。CEFR Can-do をコースのレベル設定の参考にする、自己評価チェックリストを取り入れてみる、振り返りシートを作ってみるなど、どれか1つでもいいから興味がある部分からぜひ取り入れてみることをおすすめします。必ずや、授業改善の助けになってくれるはず



参考文献

国際交流基金（2009）『JF 日本語教育スタンダード試行版』